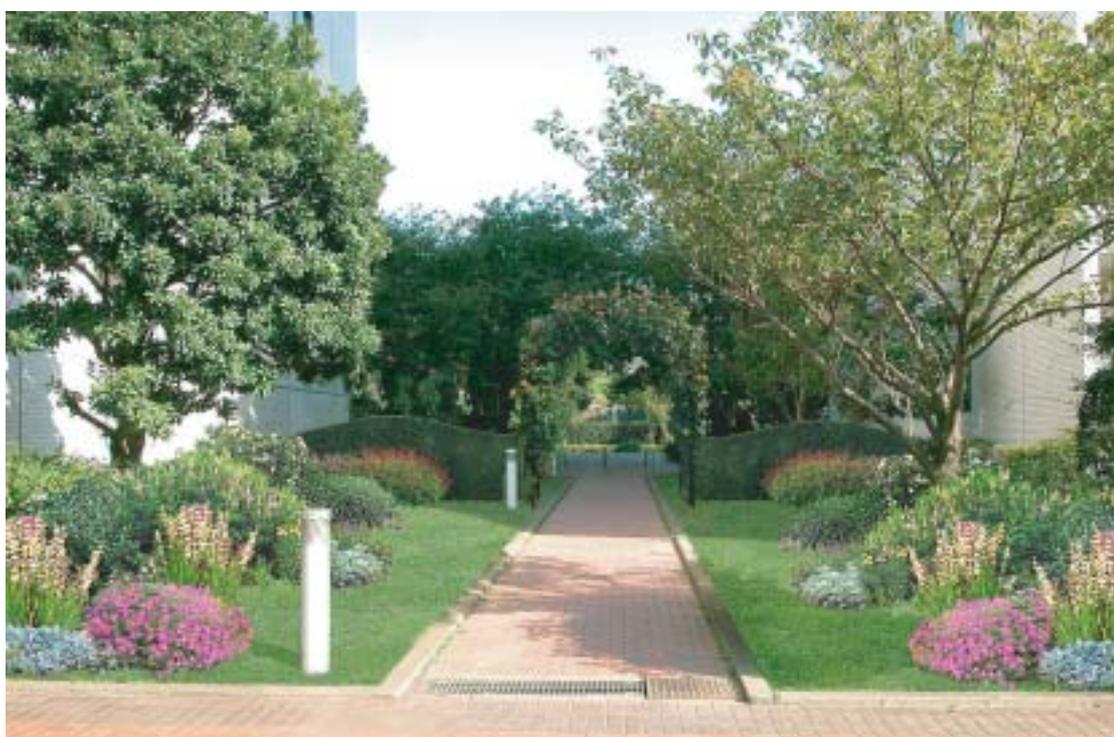


ニューシティ東戸塚パークヒルズ

草花を美しく生き生きと育てるための

管理マニュアル



ニューシティ東戸塚パークヒルズみどりの会

はじめに

さらに美しく魅力あるパークヒルズの実現に向けて

この管理マニュアルは、「みどりの会」に参加された住民の皆さんが、花壇の管理を実践していくに際して、必要な情報や管理技術を取りまとめたものです。

パークヒルズでは、快適な住環境の実現や住居資産価値の維持・向上を図るため、平成 14 年度から 16 年度まで 3 ヶ年に亘って植栽・景観の改修整備を実施してまいりましたが、この中の新しい試みとして、草花を多用して、四季の彩ゆたかな住環境を目指した取り組みをスタートさせました。

このような取り組みに対しては、昨今の花をテーマとしたガーデニングブームの影響も手伝って、先に実施したアンケート結果においても約 7 割の方が好意的に評価していただきましたが、草花という移ろいやすい材料を使用しているために、少し油断をするとすぐにみすばらしい状態を呈してしまいます。従って、今後の維持管理においては、花壇に対する好意的な評価を裏切らないためにも、新たな対応が必要になっています。

すなわち、草花を美しく、生き生きと育てるためには、草花に対する豊富な知識と継続的な手入れ作業が不可欠であり、このためには、専門家の適切なアドバイスの基に皆さんの日常の維持管理への積極的な取り組みが望まれます。

これに先立って、この取り組みを推進しより質の高い花景観を提供していくために、平成 17 年度からはプロのガーデナーと契約を行って、花壇の充実を図っていますが、プロと接触できる折角のチャンスを生かして、是非皆さんにより高い管理技術を習得していただきたいと考えています。

この管理マニュアルはガーデニングの専門家と皆さんとが一緒になって維持管理を行っていくことを前提として作られていますから、マニュアルで補えない事柄は実地で確認しながら進めて行き、さらに、それをマニュアルに反映させていくことで、年々充実を図っていきたいと考えてます。

そして将来、専門家の手を離れ、みどりの会の皆さん自身で維持管理が可能になった時が、この管理マニュアルの完成とします。

目次(案)

はじめに	
1.草花を育てるために必要な作業について	1
2.美しい花壇づくりの考え方 計画編	2
1) 基本方針	2
2) 花壇の設置位置とCGによる景観イメージ	3
3) 花壇の見せ方	4
3.良質な花壇の作り方 施工編	7
3-1 土づくり	7
1) 土の状態を知る	7
2) 草花に適した土をつくる	8
3-2 花苗の植付け	9
1) 良い苗の選び方	9
2) 植付けの方法	9
4.健全で美しい草花の育て方 管理編	14
4-1 健全に育てるための作業種目	14
1) 灌水	14
2) 病虫害駆除	15
4-2 美しく維持するための作業種目	17
1) 除草	17
2) 花茎の矯正	18
3) 花殻摘み	18
4-3 花を長持ちさせるための作業種目	19
1) 摘心・摘枝	19
2) 追肥	21

1. 草花を育てるために必要な作業について

草花を、年間を通して楽しむためには、どの季節にどのような種類の花をどのように構成するか計画しなければなりません。

また、草花を花壇に植えて、健全に美しく育てて長く楽しむためには、花壇の作り方（施工）と草花の育て方（管理）の両方に気を配る必要があります。どちらか一方が欠けても、美しい花景観は楽しめません。

「計画について」

計画段階では、まず花壇予定地に対して、場の特性に基づいた花の演出のためのテーマを設定し、これに沿った修景方針を確認しておく必要があります。そして季節ごとの花の色や構成など演出の方法を検討し、これに合致した植物を選び出すことが成功の第一歩です。

「施工について」

施工段階では、花壇の土の状態と植えつける花苗の質や植込みの密度が問題です。パークヒルズの土は、必ずしも草花の生育に適しているとはいえません。このような場合は、土壌改良や施肥により生育に適した土に改良していくことが必要です。

しかし、どんなに生育に適した良好な土であっても、植えつける花苗が悪くてはその後の生育はままなりません。そのため良い花苗の選び方も土と同様に重要です。また、花苗の植えつける方法や数量（密度）が正しくないと、たとえば株数が少ないといつまでたっても土が見えて花いっぱい景観にならず、多く植え過ぎると蒸れたり徒長して雨や風で倒れ、美しい花景観を作り出すことはできません。

「管理について」

つくった後の管理作業も重要です。せっかく良い土に良い花苗を植えても、乾燥や病害虫の被害を防ぐ作業をおろそかにすると、健全に育たず枯れてしまいます。

美しく維持するための作業は、除草の他にも雨や風で倒れた株を元に戻すことや、花の終わった花殻をこまめに摘むことが大事で、これを怠ると折角の花景観も美しさが半減してしまいます。まして雑草に覆われた花壇では観賞価値は無いに等しく、存在価値を問われることとなります。

花を長持ちさせるための作業も欠かせません。花を長く楽しむためには株に余計な負担やストレスをかけないように気を配ります。株を充実させるためには、余分な枝葉の剪定をしたり、芯を摘んで芽数を増やして花がたくさん咲くようにします。また、花後は美しく咲いて楽しませてもらったお礼に速効性の肥料を追肥としてあげると、その後の生育が良くなり再び美しい花が楽しめます。

2. 美しい花壇づくりの考え方 計画編

1) 基本方針

パークヒルズに相応しい花壇をつくるためには、次のことに留意しましょう。

居住区の環境特性に配慮し、中間色を主体とした柔らかで落ち着いた花壇とする
 宿根草や常緑の地被植物をベースとし、四季を通して彩が絶えないよう一年性草花を加えて構成する
 植物の生育特性に着目し、多(品)種を用いて立体感のある花の構成を目指す

表2 - 1 エリア毎の修景方針と主な使用植物

	修景方針	季節ごとの主な使用植物(基本構成種を除く)	
フ 口 ン ト ヤ ー ド	・パークヒルズの玄関として「もてなし」の心を表現する ・築山の景色を引き立てる縁としての効果も合わせて発揮できるようポリウム感のある構成を目標とする	春	ハナビシソウ、デルビニューム、ラクスパー、ホワイトレースフラワー他
		夏	ジニア、ピンカ、イソトマ、サルビア・コクシネア、ブルーサルビア他
		秋	夏草花に加えて、ガーデンマム、クジャクアスター他
		冬	クリサンセマム・ノースポール、ピオラ、デージー、プリムラ、メラコイデス他
幹 線 通 路	・パークヒルズにいる事を実感するような、あるいは何かほっとするような「安心の心」を表現する ・生活の中で常に接する空間であるから、適度な華やかさと季節が感じられる構成を目標とする	春	スイートアリッサム、チューリップ、クロッカス類、ルピナス、ラクスパー他
		夏	矮性カスミソウ、ガウラ、コリウス、キキョウ、木立ペゴニア、ユリ類、メキシコヒマワリ他
		秋	夏草花に加えて、宿根サルビア類、キク類、ペンタス他
		冬	ミニシクラメン、プリムラ・ジュリアン、ハボタン、ピオラ、クリサンセマム・ノースポール他
東 側 住 棟 間 通 路	・駐車場を挟んで外部と接する空間であるから、パークヒルズの魅力をアピールできるような「安らぎの心」を表現する ・日照確保が比較的厳しい場所であるから、日陰の植物を中心とした構成を目標とする	春	カリフォルニアポピー、ワスレナグサ、ラクスパー、イベリス、ホワイトレースフラワー他
		夏	コリウス、インパチエンス、アンゲロニア、ニチニチソウ、ブルーサルビア他
		秋	五色トウガラシ、フユサンゴ、クジャクアスター、ベデンス、ガーデンマム他
		冬	クリサンセマム・ノースポール、ミニシクラメン、ピオラ、スイートアリッサム他

2) パークヒルズ内の花壇の設置位置とCGによる景観イメージ

実際に植栽する前に、CGを用いて花壇のイメージを確認しました。このCGのイメージにできるだけ近づけることを当面の目標としています。

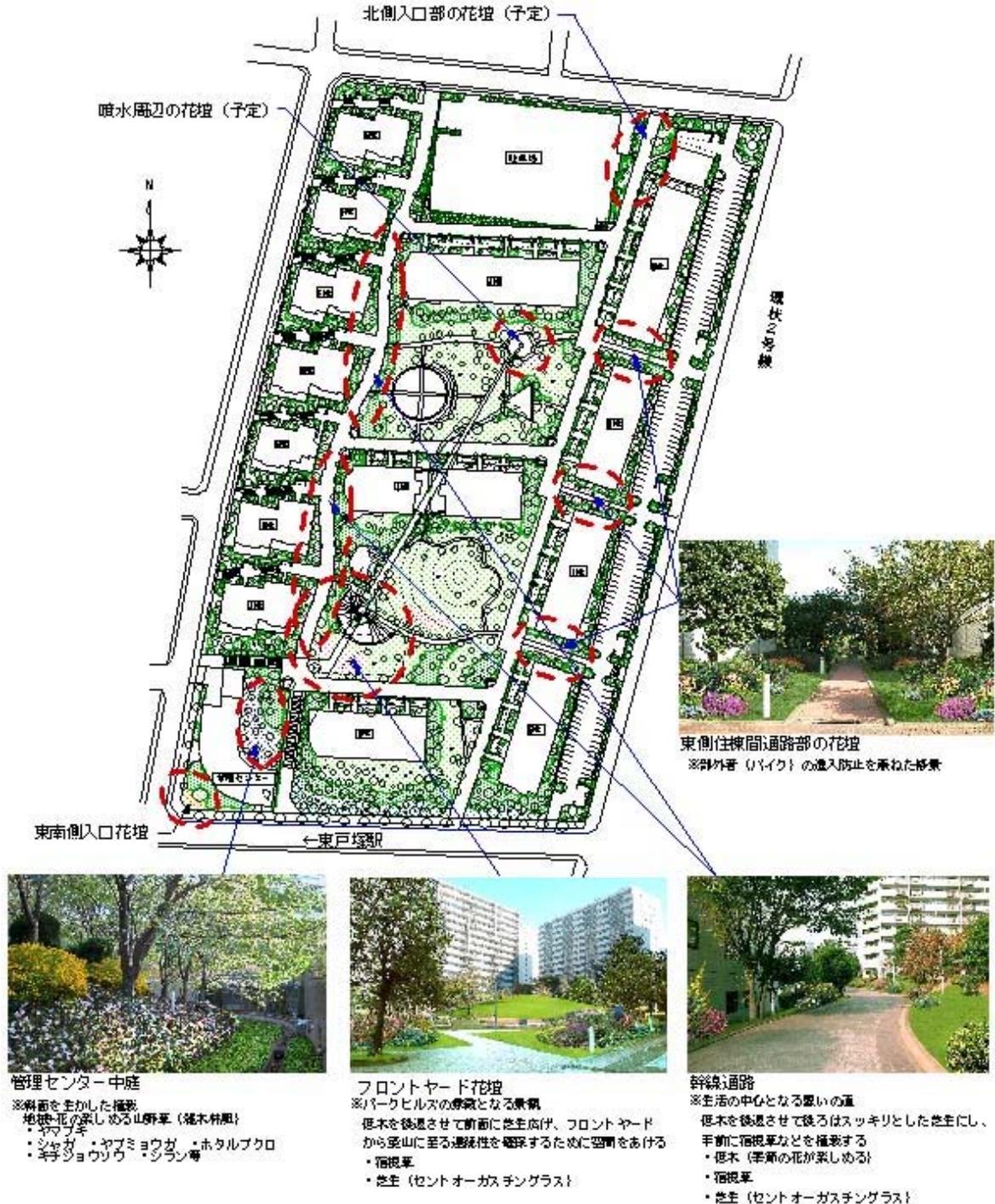


図2 - 1 花壇計画対象エリア図

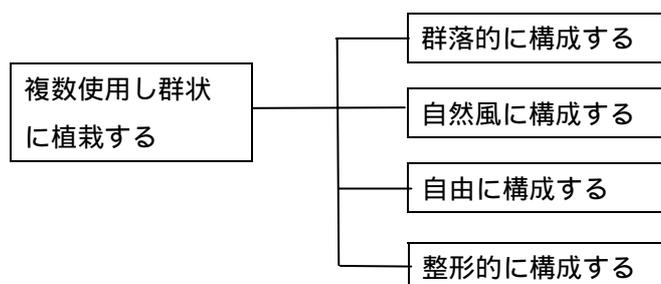
3) 花壇の見せ方

(1) 草花を用いた植栽の形態

草花を用いて花壇を作る場合、次のような植栽方法が考えられます。このうち、パークヒルズでは自然風に構成することを狙って計画しています。

(基本)

(表現方法)



花壇の表現方法	内 容
	<群落的植栽> ・野山で自然に現われる直物の群生的状態を群落景観として再現するもの
	<自然風植栽> ・自然の風景を模写し、理想化し、ある場合には抽象化することで、自然景観に近づけて、あるいは似せて構成するもの
	<自由植栽 > ・自然風植栽と次の整形植栽の中間に位置し、人工的ではあっても自由な線や形で構成され、非対称をなすもの
	<整形植栽> ・直線、対称を軸に幾何学的な規則性を持って構成するもの

図2 - 2 群状植栽の表現方法

(2) 草花の組合わせ方

草花の組合わせ方は種々考えられますが、計画意図に応じて、一般には次のような中から選択が可能です。ただしパークヒルズでは土地利用の関係から大面積に展開するのは難しく、小面積で対応せざるを得ない場合が多いことです。

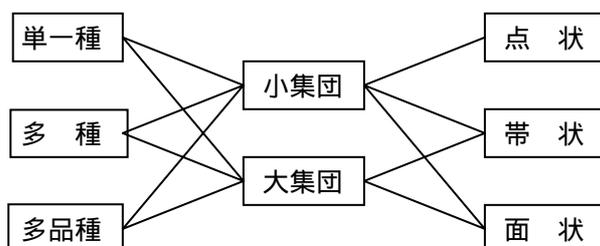


図 2 - 3 草花の様々な組合わせ方と具体的な表現（事例）

組み合わせ方法		構成の状態	事 例
(A) 単一種 小集団	単一の植物を用いて小面積に配植	点 状 帯 状 小面状	
(B) 多 種 組合せ 小集団	多種類の植物を種類ごとに小さくまとめながらモザイク状に配植	帯 状 小面状	
(C) 多品種 組合せ 小集団	単一種だが多品種を品種ごとに小さくまとめながらモザイク状に配植	帯 状 小面状	

組み合わせ方法		構成の状態	事 例
(D) 単一種 大集団	単一の植物を用いて大面積に配植	面 状	
(E) 多 種 組合せ 大集団	多種類の植物を種類ごとにまとめて大面積に配植	面 状	
(F) 多品種 組合せ 大集団	単一種だが多品種を品種ごとにまとめて大面積に配植	面 状	
(F) 多 種 混 在 大集団	多種の植物をランダムに混植して大面積に配植	面 状	

3 . 良質な花壇のつくり方 施工技術編

3 - 1 土づくり

草花を健全で美しい状態に保つためには、土づくりが何よりも重要です。良い土づくりを行うためには、まず、植栽地の土の状態を確認し、草花の生育にとって問題が生じそうであれば、植え付け前に改良を加えて、草花に適した土にしておく必要があります。

1) 土の状態を知る

パークヒルズは地山を造成して建設されました。この造成方法は地山を削り取り、低い処にその削り取った土を埋めるといったやり方でしたから、多くは土中にあった肥料分のない土が表面を被っており、このため、次のような問題を抱えています。

すなわち、パークヒルズの土の状態は、

通気性や透水性が不良な粘性を示す

建設当時の残材や石などが多く混じている

ため、植栽を行う時に大変苦労する土壌です。このような土の状態では、仮に植物を植えたとしても、正常な生育は望み辛いものです。従って、草花を植えるに際しては、まず、土を改良することから始めなければなりません。

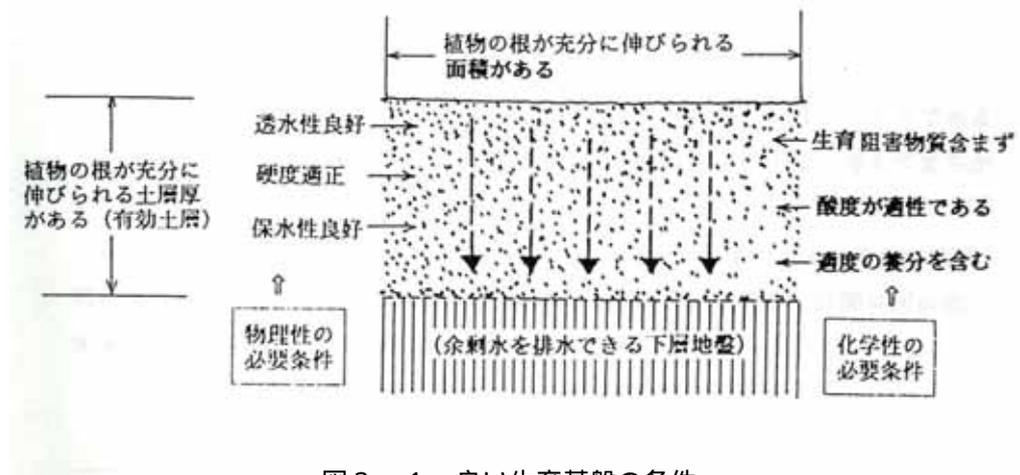


図3 - 1 良い生育基盤の条件

2) 草花に適した土をつくる

草花に適した土とは、次のような条件を備えているものを言います。

植物が十分に根を張ることができること（柔らか過ぎず、硬過ぎず）
水を良く通し、しかも適度に土の中に水を含むこと（透水性、保水性）
植物の生育に支障のない酸度状態（pH5.5～6.5）を保持していること
適度の養分を保持していること（微生物の生存を可能にする）

上記のような土にするためには、対象地では次のような作業が必要です。

< 土壌改良の手順 >

土の中に含まれる建設残材や石などを丹念に取り除く
手掘りスコップを用いて、20～25 cmの深さまで掘り起こす
掘り起こした後に有機質系の土壌改良資材(宿根草には完熟パーク、1・2年草には完熟の牛糞堆肥)を15～20 / m²混入する
基肥として化成肥料（窒素: 磷酸: カリ = 8 : 8 : 8）を150～200 gと、酸度を調整するための苦土石灰（150 g/m²）を共に混入し、2～3回土を切り返す

窒素：植物の生長源となる養分、根茎

や茎を伸ばすエネルギーになる

磷酸：花を咲かせる養分、不足すると

花の色がくすんだりする

カリ：茎を強くする養分

< 苦土石灰の役割

草花は一般に酸性土を嫌う性質がある

ために、アルカリ性の石灰を撒いて土壌

酸度を中和させることを目的とする

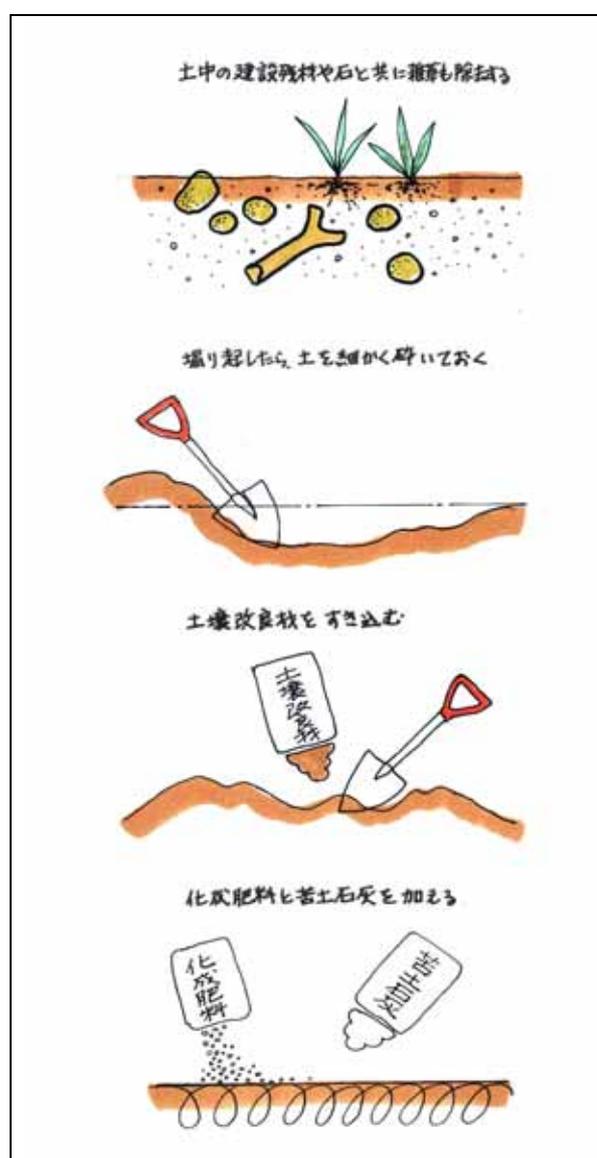


図3 - 2 土壌改良の手順

土づくりは、草花の植え付けの少なくとも数日前に実施し、その後、降雨を待つか、意図的に灌水して基肥と苦土石灰を植栽用土に馴染ませておきます。

3 - 2 花苗の植え付け

1) 良い苗の選び方

良い花壇を作るためには、次のように良い花苗を用意しなくてはなりません。

花苗の茎葉は、茎数が多く勢いがあり、葉色に艶のあるもの
根鉢は、ポットを引き抜いた時、底面と側面に新しい芽が展開し、かつ根詰まりを起こしていないもの
徒長苗の発生や、病害虫の発生が認められないもの



図3 - 3 良い苗とは

2) 植え付けの方法

植え込みの場所は、花苗の植え替えをする度に、草花が発根しやすい状態になるよう土塊を細かく砕きながら、敷き均しておきます。

(1) 草花の植え付け

配植の仕方

配植の仕方には、いくつかの方法がありますが、花同士の重なりを防ぎ、より自然に見せるためには、次のように互い違いに植える千鳥植えが適当です。

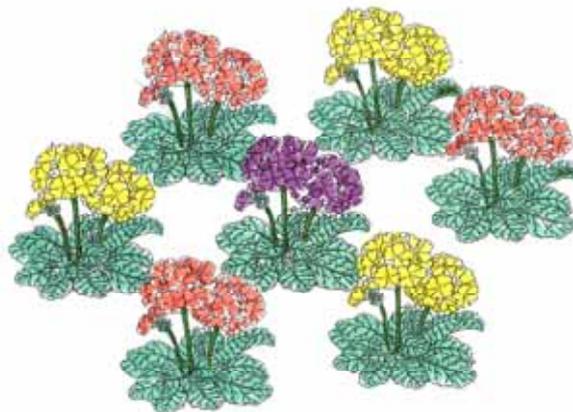


図3 - 4 千鳥状の配植の仕方

植え付け間隔

花苗の間隔は、草花が生長した時点で葉が軽く触れ合う程度の間隔が適当です。因みに生長後の背丈が 40～50 cmに達する花苗の場合は、ポット苗の規格を 10.5～12.0 cmと想定すると、1 mの長さに対して 5～6 鉢（25～30 鉢 /m²）程度で植え付けるのが一般的です。宿根草などで将来、より大きく生長するような花苗の場合は、1 mの長さに対して 3～4 鉢（9～16 鉢/m²）程度でも十分地表を被ってくれます。

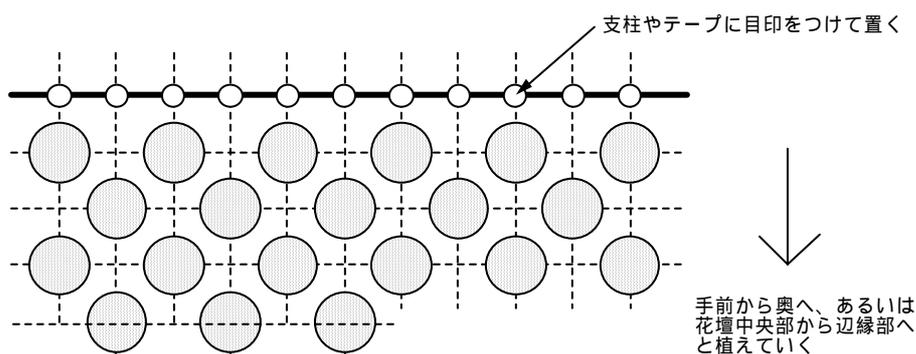


図 3 - 5 植え付けの仕方

植え付けの要領

花苗の植え付けは苗床（ベッド）が乾いている時に行いますが、作業を始める前に花の種類ごとに植え付け場所を確認し、できれば頭の中で植え付ける順序についてシュミレーションを行っておきます。最初のうち、慣れない場合は、一塊（シェル）の花苗をポットのまま花床に並べて、配置間隔やバランスを確認しながら作業すると間違いのない植え付けができます。

具体的には、次の要領で行います。

植え付けは花壇の中央部から、あるいは骨格となる植物から始める
辺縁部はより植栽密度を高くして、横のラインを美しく整える
植え穴は、鉢より多少大きめに掘り、根を十分広げて植え付ける
鉢を植え穴に置いた後は、土を被せ、根元を軽く押えて植え付ける

(2) 球根の植え付け

球根の選び方

球根は形が大きくしっかりしたものを選びます。球根の底部が変色、又は腐っているもの、病斑のあるものなどは植え込む前にチェックして、取り除いておきます。

球根の消毒の仕方

の要領で選ばれた球根も、苗畑ですでに細菌や菌類に汚染されていたり、害虫の卵が産み付けられていたりすることも生じます。このような場合の予防措置として球根の消毒が必要になってきます。消毒は次のような方法が考えられます。

表3 - 2 球根の消毒方法

消毒方法	要 点
温湯へ浸漬する	・ 球根を 45～47℃ の温湯に 60 分程度漬け込むことで、熱に弱い細菌や害虫を駆除する方法で、ネマトーダやハダニの駆除に効果的である
(薬剤防除)	
薬液へ浸漬する	・ 球根を薬液に 30～60 分漬け込む方法で、浸漬が終わったら日陰で表面を乾かしてから植え込む
薬剤を粉衣する	・ 球根を薬剤の中でまぶして、表面から薬剤を浸透させる方法



図3 - 6 薬剤を粉衣する方法

薬剤を粉衣する方法は、ベンレートのように吸湿性の高い薬剤に適した方法で、右図のように、ビニール袋の中に球根重量の 0.4% の水和剤を袋に入れて口を縛り、軽くもむようにして球根の表面に薬剤をまぶしていく。

注)

ランキュラスやアネモネのような小球根は急激な吸水によって組織が破壊されることがあるので、温湯浸漬や薬液浸漬の方法は適さない

植え付け時期

球根の植え付け時期は、秋植えと春植えに分かれます。

秋植え（10月下旬） 早春から夏にかけて咲く球根類に対して

春植え（4月上旬） 早春から夏にかけて咲く球根類に対して

植え付け間隔

球根の大きさは種類ごとにまちまちですが、植え付け間隔については、一般には球根の幅の2~3倍の間隔を開けると良いと言われています。ただし、生育旺盛なカンナなどはかなり離して植えます。

表3 - 3 球根ごとの植栽密度

春植え球根（球/m ² ）		秋植え球根（球/m ² ）	
ダリア	1~3球	ユリ類	20~30球
ジンジャー	4~5球	ヒヤシンス	30球
カンナ	4~5球	アネモス	30球
アマリリス	18球	アイリス	30球
カラー	30球	ワットソニア	30球
グラジオラス	30球	スイセン類	30球
ヒメヒオウギスイセン	45球	ラナンキュラス	30球
		スノーフレイク	45球
		ハヤザキグラジオラス	45球
		コルヒカム	45球
		チューリップ	45球
		オキザリス	60球
		バビアナ	60球
		オーニソガラム	60球
		イキシア	60球
		シラー	60球
		タマスダレ	60球
		アリウム	60球
		ムスカリ	90球
		クロッカス	90球
		スノードロップ	90球

植え付ける深さ

植えつける深さについても、浅い方が良いもの、逆により深くした方が良いもの等球根の種類によって様々ですが概ねは球根の高さの1.5~3倍程度を目安にします。

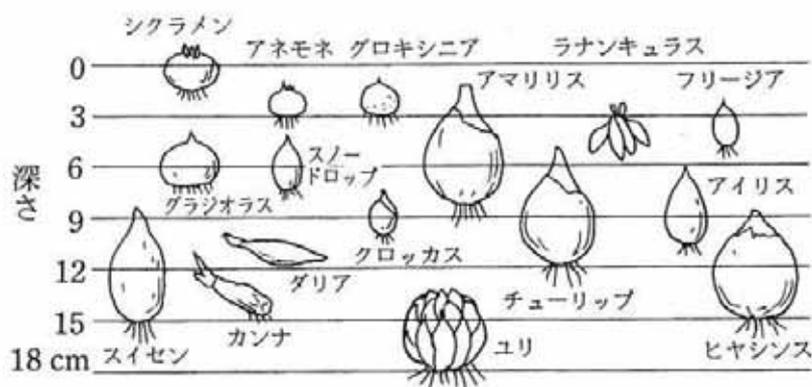


図3 - 7 球根ごとの植え付けの深さ

球根類の花後の管理方法

球根類は、チューリップなどのようにその年の観賞だけを目的にするものは速やかに抜き取ります。

次の年も観賞する場合は、そのまま土の中に置いておく場合と、掘りあげて貯蔵する場合がありますが、いずれの場合も花が終わったら軽く追肥(お礼肥)を施します。

花後2ヶ月程度が経過し、葉が黄色味を帯びて来ると、開花後に葉の光合成によって作られた養分が地下部に降りて球根に貯蔵されたことを示すサインとなります。

そのまま土の中に置いておく場合は、そのまま放置するか、地上部を刈り取りますが、貯蔵する場合は、掘りあげるタイミングです。

4 . 健全で美しい草花の育て方 管理技術編

4 - 1 健全に育てるための作業種目

1) 灌水

灌水とは、植物が生命維持のために必要とする水分を人為的に補給することをいいます。特に花苗の植え付け時から一週間は最も重要で、植え付けに伴う環境変化に対してダメージが生じないように十分に灌水を施すようにします。

灌水を行うことは、同時に花苗の生育状態を確認し、あるいは病害虫の被害をチェックする機会でもあります。

(1) 灌水のタイミング

灌水は葉に萎れの兆候が見られる場合や、土が乾いたら施用するのが基本です。土が乾くとは、地面が全体的に白っぽくなった状態を指します。下図に示すように、植えた花苗の根鉢の周辺が白っぽくなってきたら乾き始めたサインです。

特に夏季の日照りの日には、この状態が生じ始めてから 1 日以内に乾き切ってしまうため注意が必要です。

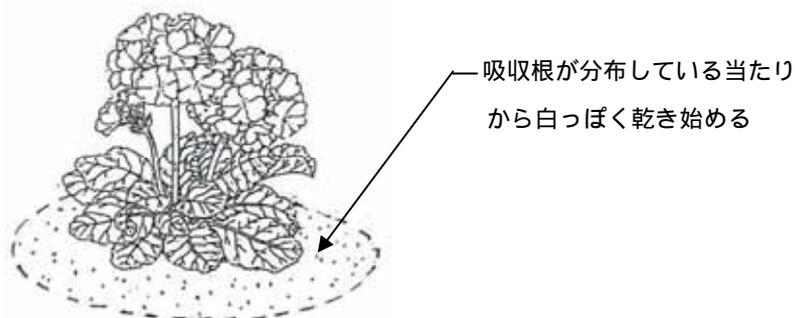


図4 - 1 灌水の目安

(2) 灌水方法

パークヒルズでは自動灌水の設備がありませんので、ホースを用い、この先にハ口ス（金属製の散水ノズル）を付けて、手播きで行います。

散水時は次の点に注意します。

球根を痛めることのないよう丁寧に行うこと 根に十分に水がいきわたるように行うこと 日中を避け、朝または夕方に行うようにすること

(3) 灌水量

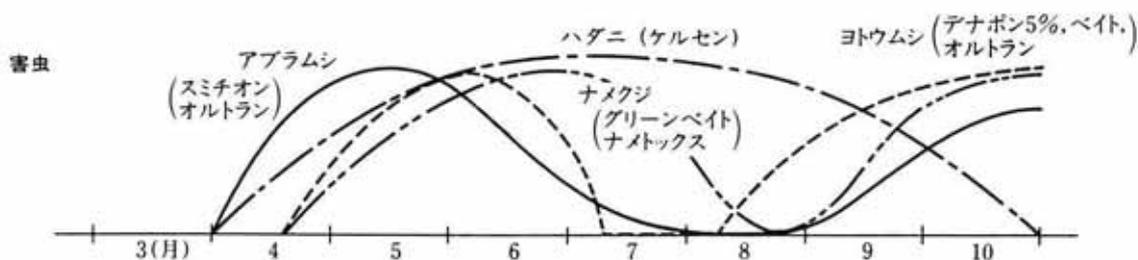
一回当たりの灌水の量は、通常、1 m²当たり 2（深さ 10 cm までの土壤に十分水がしみこむ量）程度とし、時間を掛けて行います。ただし、梅雨期や冬季の気温の低下した時期は灌水した後、苗床が中々乾かないことがあるので、灌水量の調整を行うことが大切です。

2) 病害虫駆除

病害虫は特定の種類の植物に多く発生します。従って、発生が予想される種類に対しては、常に目を配り、大発生しないうちに駆除することを心掛けます。

(1) 主要害虫と発生パターン

アブラムシやハダニ、ナメクジ、ヨトウムシなどがよく発生します。



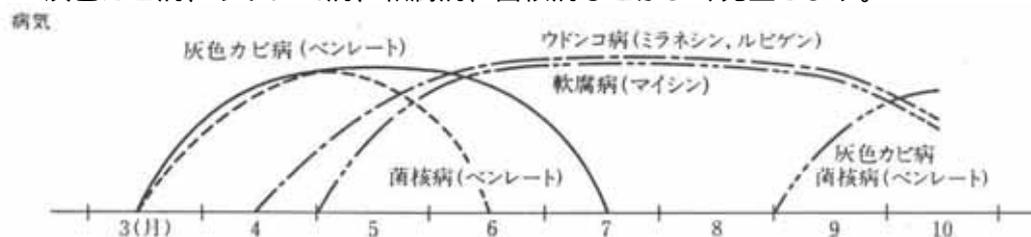
注) 上図()は薬剤を示す

	<p><アブラムシ></p> <p>発生条件：20～25 が適温、雨天や夏の高温期は抑制される</p> <p>発生部位：蕾、花、芽、新葉、葉裏などに寄生し、吸汁する</p> <p>波 及：モザイク病を媒介したり、スス病の原因になる</p> <p>予 防 法：窒素肥料を控えることや乾燥させないこと</p>
	<p><ハダニ></p> <p>発生条件：高温、乾燥、晴天を好む</p> <p>発生部位：葉裏に寄生し、吸汁する</p> <p>予 防 法：乾燥させないこと</p>
	<p><ナメクジ></p> <p>発生条件：湿気が多く、有機物の多い土壤に発生しやすい</p> <p>発生部位：新芽、新葉、蕾、花弁を食害する（夜間に活動）</p> <p>予 防 法：過湿状態にしないこと</p>
	<p><ヨトウムシ></p> <p>発生条件：特になし、年2回発生する</p> <p>発生部位：葉裏や地中に潜み葉や花弁を食害（夜間に活動）</p> <p>予 防 法：5月の連休明けに幼虫が現われる時を狙って駆除</p>

図3 - 2 主要害虫の発生パターンと要点

(2) 主要病害と発生パターン

灰色カビ病、ウドンコ病、軟腐病、菌核病などがよく発生します。



注) 上図 () は薬剤を示す

	<p>< 灰色カビ病 ></p> <p>発生条件：梅雨時期など多湿期に発生</p> <p>症 状：葉柄や花茎基部に灰色のカビを生じ、腐敗する</p> <p>伝 搬：罹病個体やその残渣が伝染源になる</p> <p>予 防 法：密植を避ける、花殻はできるだけ除去する</p>
	<p>< ウドンコ病 ></p> <p>発生条件：乾燥期や茎葉の繁茂、周囲に罹病苗があると多発</p> <p>症 状：茎葉、花茎にうどん粉状のカビを生じる</p> <p>伝 搬：風によって伝染する</p> <p>予 防 法：密植を避ける</p>
	<p>< 軟腐病 ></p> <p>発生条件：梅雨時期など多湿期に、排水不良の土壤で多発</p> <p>症 状：茎葉に水浸状の病班が生じ、やがて腐敗する</p> <p>伝 搬：土中に存在し、伝染する</p> <p>予 防 法：排水対策を施し、土壤消毒を実施</p>
	<p>< 菌核病 ></p> <p>発生条件：排水不良で、空中湿度が高い時、低温時にも</p> <p>症 状：茎の基部が軟化して腐敗する、後に菌核が生じる</p> <p>伝 搬：土壤表層に残存した菌核が伝染源になる</p> <p>予 防 法：過繁茂を避ける、発病場所では土壤消毒を実施</p>

図3 - 3 主要病害の発生パターンと要点

4 - 2 美しく維持するための作業種目

1) 除草

雑草は花苗にとっては大敵です。特に、植え付け後の土壌は膨軟で、花苗のポリウムも小さいために株間に空きができ、光を通し易くなって雑草が侵入しやすくなっています。一般には雑草の方が生命力旺盛ですから、そのまま放置すると、被圧され、養水分を奪われ、あるいは過密になって通気性が悪くなるなど花苗の生育障害となり易い状況が生じます。また、本来の構成意図とは異なった異質な形状が入り込むため、デザインや美観上も望ましくありません。

(1) 雑草の発生パターン

雑草には次のような発生パターンがあります。

春型雑草：春先に芽生え春を盛りとして、梅雨時期まで生育するパターン
 夏型雑草：春に芽生え夏を盛りとして、晩秋降霜時期まで生育するパターン
 秋・冬型雑草：夏の終わりに芽生え秋から冬にかけて生育するパターン

表 4 - 1 雑草の発生パターンと主な雑草

	春型	夏型	秋～冬型
	春暖日	梅雨	秋冷日 短日 降霜
芝生の雑草	イネ科 一～二年雑草 発生成長成熟 { スズメノカタビラ スズメノテッポウ	カヤツリグサ メヒシバ エノコログサ ニワホコリ オヒシバ イヌビエ ナルコビエ ウシグサ	発生成長 { スズメノカタビラ スズメノテッポウ
	広葉 一～二年草 発生成長 { タデ アカザ	発生成長成熟 { コシキソウ スベリヒユ エノキグサ その他多数	発生成長 { ヒメジオン (越) ヒメムカシヨモギ (越) ハルジオン (多) ノミノフスマ (越) ハコベ (越) ナズナ (越)
	多年雑草 { イネ科 { カモジグサ, コスカグサ, スズメノヒエ, カゼグサ チカラシバ, ナガヤ, ススキ, ヨシ 広葉系 { クローバー(白), メドハギ, ギシギシ, イタドリ, ヨモギ, スギナ チドメグサ, ハマスグ, タンポポ, フキ, カタバミ, ジシバリ		

(2) 除草の方法

除草は手を使って行います。雑草は幼苗期（本葉が2枚程度）に除去すると、作業も容易に行えます。やや大きくなり、根の張ってしまった雑草は草取り鎌を用いて、根の下の土を押し上げるようにして抜くと、花苗を痛めることなく除草を行うことができます。

(3) 除草の頻度

雑草の発生は夏季が多いことを踏まえて、次の頻度で実施します。

晩春～夏季は2回/月程度

秋季～早春は1回/月程度

2) 花茎の矯正

花茎の矯正は倒れたり、暴れたりしている茎を良好な状態に戻す作業です。

背の高くなる草花は特に、風の影響や降雨によっても倒れやすくなりがちで、生育的にも美観的にもマイナスとなりやすいため、倒れかかったものは速やかに支柱を添えて、矯正します。

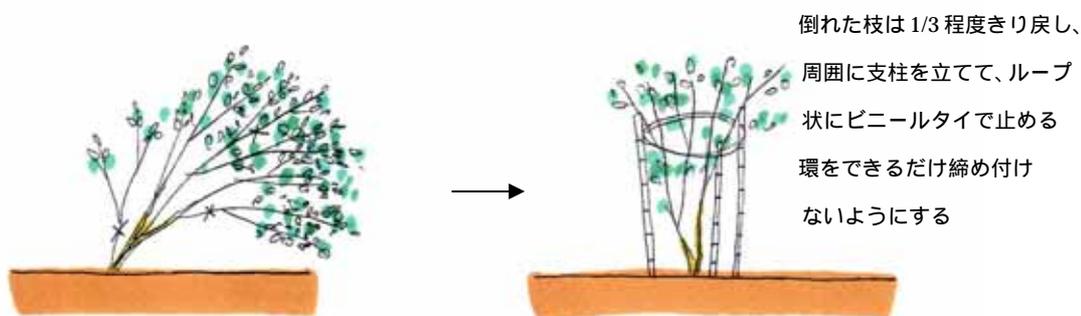


図4-1 矯正の方法

3) 花殻摘み

開花を終わって萎んでしまった花を摘み取ることを花殻摘みといいます。

花殻は、美観を保ち、病気や結実を予防して、次の美しい花を数多く咲かせることを目的として行います。

ペチュニアやカンパニュなどの花は雨に溶けやすい性質があるので、特に、花殻摘みを欠かさないようにします。



図4-2 花殻の摘み方

4 - 3 花を長持ちさせるための作業種目

1) 摘心・摘枝

摘心・摘枝は大きく育ちすぎて形姿が乱れやすくなったり、あるいは風雨によって倒れやすくなることを避けるために実施します。同時に、花後に次の花を促進させるため大変効果的です。

(1) 次花の促進

花が咲き終わった後、腋芽を伸ばして直ぐに次の花を咲かせるタイプの草花は、花殻摘みと同時に茎や枝を切り詰めて草姿を整えてやることによって花芽分化が促進され、次々と多くの花を咲かすことが期待できます。

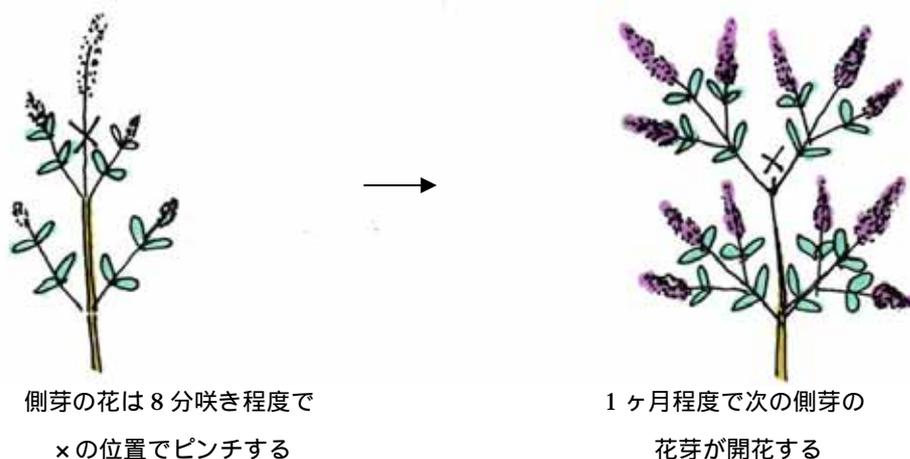


図4-3 次花の促進を目的とした摘心・摘枝

(2) 草姿の矯正

年2回のピンチを実施するタイプ

宿根性のサルビア類は年々大株になっていきますが、放置すると雨や風の影響で倒れやすくなり、草姿を乱すことが多いため、このようなタイプの草花には次のように摘枝を行います。

第1回目は6月上旬に、2年目以降を過ぎた大株に対して、やや低めにピンチする。

第2回目は8月中旬までに、前回ピンチした枝が再度伸長した長さの半分程度を目安に切り戻し、枝数や目つきが多く腰のしっかりした株に仕上げる。

ビデンスや高性の秋咲きキク科植物にも同様の管理を施用する(秋咲き種の場合は第2回目のピンチの時期は花芽が損なわれる事のないよう8月の第1週までには済ませておく)。

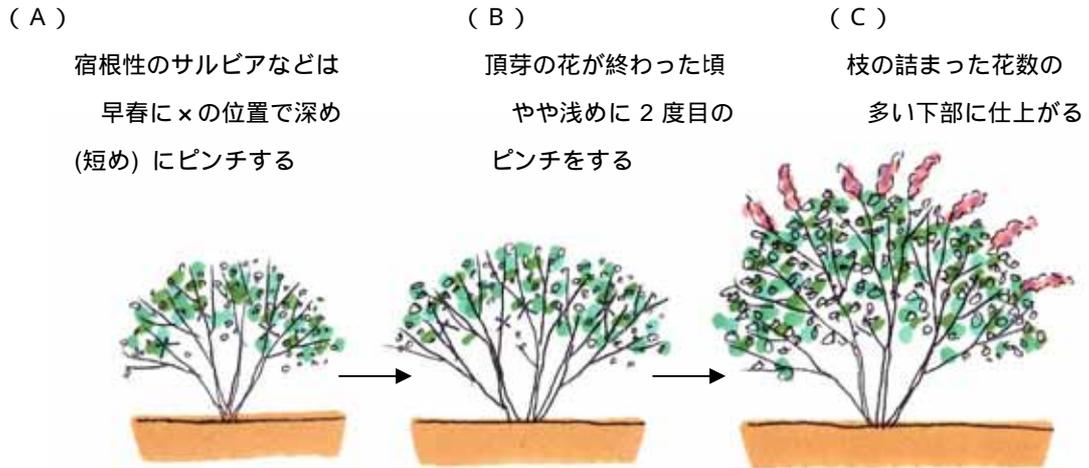


図3 - 7 年2回のピンチの方法

年1回のピンチを行うタイプ

ガウラなど初夏から秋まで咲き続ける宿根草の中で、倒れやすいものに対しては、梅雨明け頃1/2程度の高さで一度刈り込んでおくと、以後6~9月に掛けて次々に花が上がってきて長い間楽しませてくれます。

1年草の株は頂芽の花が終わった
頃合いに破線の位置でピンチする

側芽の生長が促進されて
整った株になる

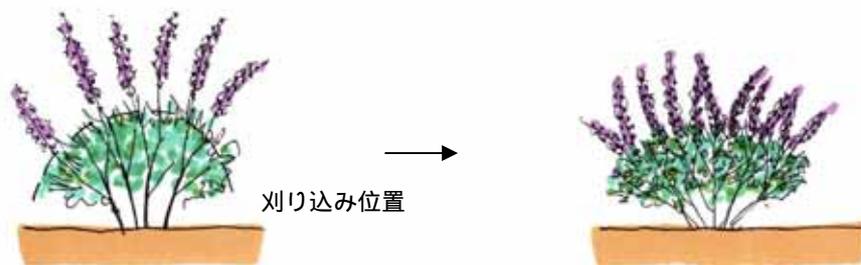


図3 - 8 年1回のピンチの方法

隔年 1 回程度のピンチを行うタイプ

ローズマリーなどドライな環境を好む植物は、湿度の高い国内では蒸れを生じやすいため、次のように通風に配慮したピンチを行います。

枝が込み合った株に対して、枝透かしを飛び飛びに行う
一枝置きにやや深めに切り戻しを行い、通風を良くする
ピンチ後の枝の先に側芽が出てきたら、前年に施用しなかった枝をピンチし、形姿を整えていく



図 4 - 4 隔年 1 回のピンチの方法

2) 追肥

追肥は、花苗が消費して土中に少なくなった養分を補給してあげることです。通常、花床には基肥として施用された肥料分が予め存在するため、3 ヶ月程度で入れ替えることを前提とした開花直前の花苗には追肥は必要ありません。

(1) 施用対象

次の植物を対象として施用する。

定植後長期間生育する 1~2 年草及び宿根草に対して
定植した球根類に対して

(2) 施用量

対象植物ごとに次の量を施用する。

観賞する期間が 3 ヶ月を超える草花には、2~3 ヶ月に一回、基肥の 1/3 (50~70g / m²) 程度の化成肥料 (8:8:8) を施用する
球根類には、開花後の球根を充実させるために化成肥料を 30g / m² 施用する
宿根草類は生育途中と開花後に同じく基肥の 1/3 程度の化成肥料 (8:8:8) を施用する